
かみさま

冷泉晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみさま

【著者名】

NZコード

冷泉晃

【あらすじ】

少年少女の成長の記録、そしてそれを見守つたある偶像のお話。

陽炎がじりじりと地面に燃え、蝉たちがやかましく騒いでいる。そんな喧騒は子供たちにも飛び火し、立ち並ぶ家屋の中ぽつかりと空いた領域　いわゆる空き地にて、無邪氣な笑顔をこれでもかと振りまきながら少年少女たちは夢を背にのせ走っている。

「こで、いいかな。

はあはあと息を切らしながら、とある少年がやつてきた。そこは空き地のすぐ裏手にある、小さな空間。何故かそこだけは、周りの騒音に邪魔されない静かな空間があった。

少年は純朴そうな顔で、純粹そうな瞳である一点を見つめる。

マタアシタ。

何故かその壁にはそう書いてある。古い木でできた壁に、何者が彫刻刀などで彫ったのである。その彫った文字の溝さえも、もう変色してしまっている。

また、明日。

少年は前から気になっていた。これは一体、何なのだろう。誰が彫つたものか。

しかしながら少年は、この場所の、この謎の文字がどこか好きだつた。

「ユウコ！　今誰がオニや！」

いかにも腕白そうなツラをした、体格の良さげな少年。額の汗が、健康的に焼けた肌の上をきらりと光つ。少年は空き地の隅にある茂みの陰からひょいと顔を出し、もひとつ向ひつの木陰で休らう少女に声をかけた。

「わからない。でも、多分ウララだよ」

「コウ」と呼ばれた少女は木に体をあずけながら笑って応えた。少女の頭には麦わらが被せられ、その下には薄い色のワンピース状の衣服がふわりとたたずむ。そのせいか、どこか異国情緒の漂う少女となっている。

「やばい、隠れろ！」

少年が何かを察知してそう言つやいな、一人は息を呑ませたようにはよいと隠れてしまった。慣れたものである。

彼らが隠れる空き地の前を、すたつと人影が走りすぎた。黒々とした髪をなびかせて走り去ったその影は、すぐ角を折れて右へ入った。彼女がそのオニである。ちょっと行くと、住居と住居の隙間に子供なら通れなくもないほどの細い通路が続いている。彼女は足を止め、空気を吸い込んでひとつ深呼吸をしてから、何か決意したようにはその通路に入つていった。少し苦労しながらも、あつという間に奥までたどり着く。するとまたそこから左に折れて

そうこうしていると、細道は終わりやつと広い空間へ出る。するとそこには、何も知らない少年がぽつねんと突っ立っていた。

「はいタツチ！」

「うええ！？ ウララ！ どうじここが！」

少年は、自分しか知るはずのないこのお氣に入りの空間に気づかぬ内に侵入され、焦りを隠せないでいる。

「知ってるよ、サトルがいつもあっこからいなくなるの」

ウララは知つていた。サトル少年がいつもかくれんぼで勝利を收めるその理由を。いつもあの辺りからサトルが細い道へ入つていくのをちらりと見ていたのだが、その度に、自分もついて行つて確かめるだけの勇気が無かつた。今日はその勇気をちよこつと振り絞れたというだけの話である。

「うげえ」

サトルは残念そうに洟らした。

「でも、こんな所あつたんだ。知らなかつた」

ウララは改めてその場を見回す。妙な空間である。空き地からは

とても近い位置にあるくせに、直接行くことはできない。迂回して、細い通路をずうっと通つて初めてたどり着けるのだ。そこだけがまるで別世界のように思えてくる。

「ちえ、俺の秘密の場所だつたのに」

「でもいいじゃん、これからは四人の秘密にしようよ」

「勝手に人増やすよ。そんないつぱい来たら落ち着かねえよ。」

俺にとって、ここが一番落ち着く場所だから

サトルは、年齢不相応な感慨深い顔をして「マタアシタ」を見つめた。

「確かに、なんか静かで良いところだね」

ウララもかくれんぼのことを忘れて落ち着いてしまっている。だろ、とサトルは横目でウララを見やりながら、空を見上げた。遠くの方で鳥の群れが飛んでいく。真一文字に横切つて。

ここは、四人の秘密の場所。

まだここを知らない二人　ユウコとリョウヘイ　にどう紹介してやるつかと、サトルは考えを巡らせ始めた。

翌朝。澄んだ空気が空をどこまでも満たし、陽の光が遠慮なくアスファルトに照りつける。まさに夏模様の朝である。昨日かくれんぼをしたあの四人が、各々赤と黒のランドセルを背負つてとある十字路で集まっている。そこに至るまではサトル、ウララ、リョウヘイの三人が他愛のない話に花を咲かせながら歩いてきたのだが、ひとり家の方向の違うユウコはここで三人と合流することになるのだ。といっても、またその他愛ない話に、もっと大輪の花を咲かせることになるだけなのだが、しかし、そんな時間に限つて楽しいものである。

「ユウコ、俺な、三面までノーミスで行つてん！　すごいやひー！」

「ほんと？　すごい、リョウヘイくん」

「ちょっとリョウヘイ、自慢ばかりやめてよ」

「ウララは一面も越されへんもんな」

「なによ、あれめっちゃ難しいじゃない」

「サトルはどこまでいったん?」

「俺? まだ一面の途中」

いつの間にかみんなゲームの話題で盛り上がっていたらしい。ぼうつとしていたサトルは、少し話に乗り遅れていた。

「まだまだあかんなサトル。俺三面までノーミスやで、ノーミス」

「リョウヘイいうるさい! さつきも聞いたからそれ」

「一面も越されへん奴が怒んなよ」

「まあまあ、二人とも」

ユウコだけは、なんだか話に巻き込まれているといった感じに見える。サトルはユウコを少し不憫に思った。それでもリョウヘイはよくユウコにしゃべりかける。なかなか迷惑なことだ。

昨日のかくれんぼの後、サトルはウララに促されて残りの二人を「例の場所」に連れていった。リョウヘイはその道中は探検気分で楽しそうだったが、着いてみればそこは何もないただの空間である。つまらなさそぐに、なあんや、何にもないやん、と肩を落としてしまった。一方のユウコはどうやら気に入つたらしい。例のあの「マタアシタ」を見ながら、また明日ね、などと文字に話しかけていた。おかしな子である。サトルは、三人もの闖入者を迎えてしまつた割には何も不快な感じはせず、そこにいるだけでやはり上手く脱力して心から落ち着くことができた。その場所には何か不思議な力があるのかもしない。

どうにも三人の話につまく乗れない。それほどゲームにのめり込んでいないせいだろうか、サトルはまたぼうつと視線を向こうに漂わせ、いつもの見慣れた景色を眺めていると、道路の後方を歩く別の集団の声が聞こえた。この時間帯は登校する生徒が多い。

何かさ、近いうちに誰かこの学校から転校するらしいよ。

ええー、誰だよそれ。

分かんない。ただ、何か職員室の前で先生が引越しの準備とか、そんな話してたから。

それって教師の誰かが引っ越しとかじやねーの？
いや、そんなんじゃないっぽかった。

何だか、そんな会話だけが途切れ途切れに聞こえてきた。そんなことサトルも知らなかつた。いつたい誰が転校するのだろうか。少し不安になる。でも、それはそれで家族の事情とかそういう事があるのだろうから仕方ないとも思った。ふと横の三人を見てみると、まだゲームの話が尽きないらしく、今の転校の話は聞こえていないらしかつた。自分が聞こえてしまつたというのも、何だか嫌な感じである。

そうこうしているうちに、緑の葉を纏つた樹々たちの間から校舎の一部が見えてくる。サトルたちの通う小学校は市内でも若干古い校舎で、よくいえば伝統のある学校である。

「やっぱり装備はな、攻撃中心やねんで」

「へえ、すごいねえ

「もうやらない！ あんなゲーム

生徒たちが校庭を行くのを、穏やかな風がそつと撫でた。こうして、彼らの雑多な日常の一頁が幕を開ける。

昼休みを知らせる鐘が鳴つた。すると自然とサトル、ウララ、リョウヘイの三人が集まつておしゃべりを始める。いつもはいつも話をするか、外で遊ぶかのどちらかである。

「あれ、ユウは？」

「なんか先生に呼ばれてるみたい。なんかの委員で手伝つてんじやないかな」

「あ、そう

リョウヘイはそう洩らすと廊下の方をちらりと見た。数人の生徒がそこを駆け抜ける足音が聞こえた。

サトルは今朝聞いた話を持ち出す。

「転校の話知ってる?」

「転校? 誰が?」

「サトルお前転校すんのか!?」

「いや、俺じゃなくて……その、誰かが

「何よそれ」

ウララは遠慮なくそこらの机にどつと腰掛けた。

「俺も聞いた話だからよく知らないけど。リョウヘイなんか知ってる?」

「ん、いやあ知らんけどな……」

リョウヘイは腕を組んで考える仕草をする。

「うちのクラスなの、それ」

「いや、ほんとに分かんない。聞いた話だから」

「聞いた話ってなによ、もっとちゃんと聞いといでよ

「その聞いたってか、たまたま聞こえたっていつか

「ふうん、変なの」

何が変なのかよくわからないが、ウララはそのままつづて足をばたつかせた。

そこに、ウララの後ろから女子生徒がやってきて、そこ、私のと声をかけた。あ、ごめんとウララは机を降り、さつさと手で払つた。そしてはにかんだように笑つた。その仕草が何故かゆっくり見えた。

「そんなことより!」

外では蝉がうるやく鳴いているのに、それ以上にこの少女の声はやかましい。

「こんど池に行こうよー。」

なんとも唐突である。

「池? あそこって子供だけで行っちゃダメなところだろ」

「男がそんなこと言つてどーすんのよー ほらみんなで釣りしよう

よ

「釣りか、ええな! 俺も釣りしたい!」

リョウヘイも乗り気である。またサトルだけ取り残された。

「ねえ知ってる？あの池にはね、ヌシがいるんだよ」

「ヌシ？」

リョウヘイは田を輝かせ、サトルは胡散臭そうに話に入る。ウララは両手を田一杯広げて、

「こおんなにおつきいの。それを見てみたい、捕まえたいの！」

本当に野性的な女子だ。リョウヘイもそれを聞いて興奮したのか、ウララの話を聞きながらすげーとかほんまに？などと繰り返している。

「でも釣竿とかはどーすんだよ」

「あ、そつか」

ぽかんと何か抜けてしまったかのよつに、一人は落ち着いてしまった。

「俺ん家にあるのは鈎^{ホリ}ぐらいやしな」

「モリあるの！？ それでいいじyan」

「あかん、おとんが絶対触つたらあかん！ ゆうて貸してくれへん」

「えー、オトンのけちんぼ」

べえと舌を出してみせるウララ。ウララは相変わらず元気で活発な少女である。

しかし。

「まあとにかく今度 大人には秘密で みんなで池に行こう。

コウコも誘つてさ」

「おう、俺は行くで」

「サトルも行くよね？」

え。

「行！」

なんだか最近、ウララと田を合わせられないでいる。昔はすぐに行こう！と答えられたのに、今となっては何故か答えるのになためらってしまう。

彼女の視線。彼女の顔つき。彼女の言葉。彼女の、いじわる？

「え、ええと」

「何を迷つてんねん！ 男なら行くやうそこは」

「男とか女とかカンケーねえし」

リョウヘイには面と向かって言える。といつも逆にリョウヘイに当たつているのだろう。

「そうだよりヨウヘイ、そういうのサベシっていふんだよー」

意外にもウララが加勢する。

「なんやねん、別に変なこと言つてないやろー」

なんだか二人が言い争いといつか、口喧嘩のようなものを始めてしまつたので、話はそれでうやむやになつてしまつた。

別に迷うことなんてなかつた。サトルは池に行つてみたかった。でも、どうしてかためらつてしまつ。サトルは自分自身のそんな感情を、なかなか理解できなかつた。

昼休みももうすぐ終わる。サトルはこの時間を無駄に使つてしまつたような後悔にとらわれた。

1・1（後書き）

これが初の連載です。どうまで続くかわからん……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9171y/>

かみさま

2011年11月27日14時46分発行